

## 法隆寺若草伽藍出土の 鬼瓦と百済

はじめに 法隆寺若草伽藍出土の蓮華文鬼瓦と、その直接の源流と思われる百済の鬼瓦の様相の比較から出発して、鬼瓦を含む道具瓦における古代日本と百済の様相の一端に言及する<sup>1)</sup>。

**法隆寺若草伽藍出土鬼瓦** この鬼瓦は、1973年に法隆寺西院南面築地の修理時に出土したもので、若草伽藍所用と考えられる<sup>2)</sup> (図42)。この鬼瓦は、厚い粘土板に手彫りで、複数の蓮華文を表現したものである。厚さ4.7cmで、この破片は中央から左半分にかけての部分で、復元案では、全形は幅28cm前後、高さは23cm前後となり、3個3列、合計9個の蓮華文を配置する。背面に穿孔があり、把手状につくりだしていたようである。蓮華文の施文については、まず方眼(約8.3cm)を線刻し、その交点にコンパスで直径6.6cm前後の円を描き、16分割して、8弁を刻み出すという工程が観察されている<sup>3)</sup>。年代は、「飛鳥前期～中期」(592～643年)と推定されている<sup>4)</sup>。

この鬼瓦の類例は古代日本には見当たらないが、すでによく知られているように百済に類品が存在する。そのひとつが扶蘇山廃寺出土の石製鬼瓦である。

**扶蘇山廃寺出土鬼瓦** 韓国忠清南道扶余郡扶余邑の扶蘇山西南麓にある百済時代寺院跡、扶蘇山廃寺から出土品である(図43)。国立扶余博物館に残された記録により1942年の調査時に出土したものであることがわかるが、詳細な出土状況は不明という<sup>5)</sup>。

この鬼瓦の材質は「臘石」製で、上辺が弧状をなす長方形で、幅35.8cm、高さ28cm、厚さ5.4cmで、表面に8個の蓮華文を彫刻する。上辺にはT字状の彫り込み(長さ6.5cm、深さ2cm)がある。この彫り込みに関しては、すでに知られているように扶蘇山出土と伝える、先端をT字状に作り出した長い棒状鉄製品があり、鬼瓦の固定装置と考えられている。鬼瓦の棟への固定法が具体的にわかる数少ない資料となっている。

扶蘇山廃寺例は、若草伽藍例と酷似する形態、文様、製作技法によっており、すでに説かれているように、両者には直接の関連がうかがわれる。

扶蘇山廃寺例の類品としては、ほかに扶蘇山南麓の余双北里出土とされる鬼瓦がある。本品は扶蘇山廃寺例と



図42 法隆寺若草伽藍出土鬼瓦

異なり、瓦製品で、複数蓮華文を配置し、全形は扶蘇山廃寺例とほぼ同様に復元されている。残存部は向かって右半部の一部である<sup>6)</sup>。復元によれば幅は40.2cm、高さ27.7cmで下辺中央に半円形の削りこみがあり、文様は四弁花文を6個配置する<sup>7)</sup>。

**若草伽藍以後の鬼瓦** 若草伽藍以後の日本での鬼瓦の様相を見よう。7世紀前半代には、奥山廃寺、平吉遺跡、そして山田寺などに代表されるように、単数蓮華文鬼板が盛行し、複数蓮華文は見られなくなる。単数蓮華文への変化はまた、軒丸瓦との文様の統一をはかっている点にも注意される。さらに、文様に関して、すべて范型を用いた施文法に変わる点も見逃せない。若草伽藍例は、瓦製でありながら、范によらず、彫刻によって文様を表現するという点でも特異さが際立つ。先に見たように若草伽藍例は、平板な彫刻であり、ただちに軒丸瓦の瓦当文様との比較は困難である。この点は直接の祖形である百済扶蘇山廃寺例も同様である。

奥山廃寺例にはじまる日本での単数蓮華文鬼瓦の系譜をかんがえると、百済との関係はどうであろうか。いまのところ、単数蓮華文鬼瓦は百済には知られていないので、日本での創出されたもののように思われる。ただ、奥山廃寺例などに採用されている連珠円文については、隋様式の影響によるとされており<sup>8)</sup>、文様の面では外来

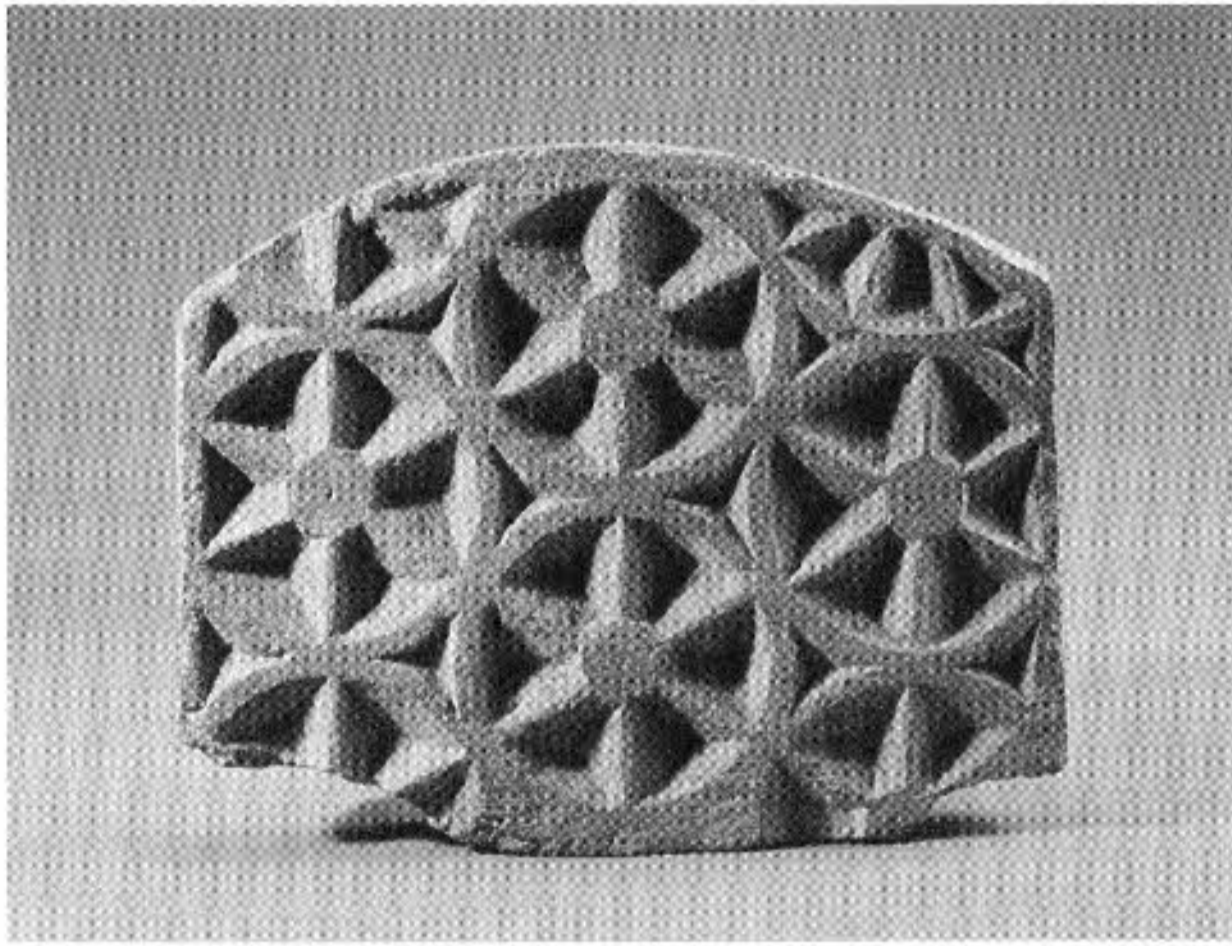


図43 扶蘇山廃寺出土石製鬼瓦

の影響が認められるものの、百済との関係は見出しがたいといえよう。

**道具瓦にみる日本と百済** 百済の鬼瓦を含む道具瓦の様相について同時期の日本の状況と比較してみよう。扱うべき道具瓦には鬼瓦、鴟尾、垂木先瓦などがある。鴟尾については、飛鳥寺にはじまる出土例を検討した結果、はじめに直接百済様式が採用され、7世紀末に大唐様式に転ずるまでの変遷を説く大脇潔の研究<sup>9)</sup>にゆずることにし、ここでは鬼瓦と垂木先瓦について述べておきたい。

**鬼瓦の様相** まず、飛鳥寺のばあいをみてみよう。6世紀末、百済からもたらされた瓦葺きと瓦製作の技術は、工人の渡来をともなうものであった。飛鳥寺では、軒丸瓦にみられるように百済の瓦と酷似する瓦（いわゆる「花組」「星組」）が製作されており、これを裏付ける。飛鳥寺の創建瓦の一種（「星組」）はのち若草伽藍の創建瓦に採用され、范の移動が確認されており、工人の移動もともなった可能性が高い<sup>10)</sup>。若草伽藍では、創建時にここでとりあげた鬼瓦が使用されるが、飛鳥寺では、創建期の鬼瓦の存在は確認されていない。若草伽藍の鬼瓦は、わが国最古ということになる。若草伽藍の鬼瓦の系譜は、扶蘇山廃寺ほかの出土例があるから、百済系であることは疑いない。百済例でも鬼瓦の文様は複数蓮華文であり、全体形は横長方形で、上辺を丸く作る点も共通する。使用位置との関係では、若草伽藍例については「塔の隅棟用か」との指摘がある<sup>11)</sup>。百済扶蘇山廃寺例は下辺左右の端部を、百済双北里例は下辺中央を、それぞれ刳ってあり、隅棟や降棟での使用が想定されよう。

**垂木先瓦の様相** 百済では、垂木先瓦が比較的盛んに用いられるのにたいして、古代日本では、垂木先瓦の使用は飛鳥寺、山田寺など、ごく一部の寺院に限られる。飛

鳥寺で主体をしめる垂木先瓦の素弁九弁と六弁の2種（種Ⅰ・Ⅱ）は、いずれも飛鳥寺創建瓦当文様との対応はみられない。ほかに、垂木先瓦には山田寺式の内区を採ったもの（種Ⅳ）もあるので、発掘報告書では、創建時ではなく「種瓦は後に補われたもの」との見解をとる<sup>12)</sup>。飛鳥寺で複数種が同時に使用された確証はない。素弁の垂木先瓦文様を百済と比較すると、6世紀後半代創建の寺院（軍守里廃寺ほか）に類例があり、また八弁で弁中央に隆線をおく型式（種Ⅳ）は、百済金剛寺、聖住寺など6世紀後半～7世紀代の寺院の軒丸瓦あるいは垂木先瓦の文様に近いことも注意しておきたい。飛鳥寺の垂木先瓦では、とくに素弁の2種については、創建時に使用された可能性も考えてみたい。山田寺では、垂木先瓦の文様は、軒丸瓦、鬼瓦、装飾金具、さらには礎石の蓮弁装飾などにまで共通してみられ、文様意匠の統一がはかられているのも興味深い<sup>13)</sup>。

**おわりに** 法隆寺若草伽藍出土の蓮華文鬼瓦と百済の鬼瓦の様相には、単に源流論にとどまらず、垂木先瓦もふくめて道具瓦としての両者の展開には興味ある相違点がかがえた。より厳密な比較には、編年をはじめとする基本的な作業が残されているけれども、今後は、屋根上での瓦の具体的な使用法を視野にいった検討も重要であること指摘しておきたい。

（千田剛道）

（謝辞）扶蘇山廃寺出土石製鬼瓦の写真掲載については、国立扶余博物館の金鍾萬・宣柔伊両氏の御高配を得た。謝意を表する。

#### 註

- 1) この種の瓦の名称については、よりの確に使用場所をしめす「棟端飾瓦」「棟端飾板」などの提唱もあるが、ここでは、慣用にしたいが、鬼瓦の名称をもちいる。
- 2) 奈良県教育委員会『重要文化財法隆寺西院大垣南面（南大門東方）修理工事報告書』1974年。
- 3) 山本忠尚『鬼瓦』（日本の美術391）至文堂、1998年。
- 4) 『法隆寺の至宝 瓦』（昭和資財帳15）小学館、1992年。
- 5) 申光燮「扶蘇山城—廃寺址発掘調査報告—」『扶蘇山城発掘調査報告書』国立文化財研究所、1996年。
- 6) 国立扶余博物館『扶余博物館陳列品図鑑』1977年。
- 7) 数値については、井内潔「複数蓮華紋棟端飾瓦について」『井内古文化研究室報』4、1970年、による。
- 8) 山本忠尚「瓦と連珠円紋」『文化財論叢Ⅱ』同朋社、1995年。
- 9) 大脇潔『鴟尾』（日本の美術392）至文堂、1999年。
- 10・11) 註3前掲書。
- 12) 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』1958年。
- 13) 奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』2002年。